

静岡県浜松市における 意見交換会の報告

【視察等概要】

日時: 令和元年9月12日(木) 午後1時30分から午後3時30分まで

場所: 浜松市消防局庁舎 6階 ホール

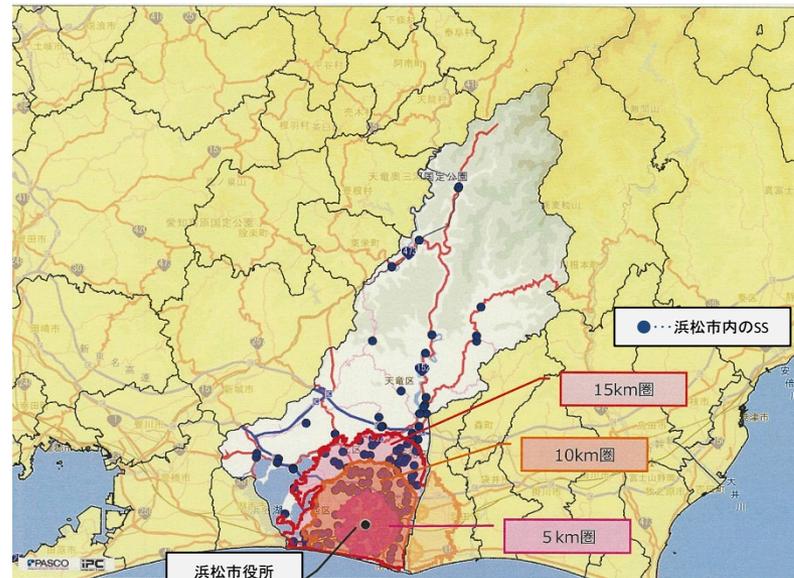
参加者: 浜松市関係者(市民協働・地域政策課岡安課長、山本中山間地グループ長)、浜松市消防局(伊藤予防課長、曾我危険物グループ長)、株式会社西渡石油守屋氏、吉井座長、石井委員代理、平野委員、松井委員、経済産業省資源エネルギー庁成瀬補佐、事務局4名

【静岡県浜松市概要】

- ・静岡県西部に位置する、政令指定都市である。
- ・人口: 約80万人(令和元年9月現在)
- ・総面積: 1558.06km²(静岡県内で1番目、全国でも2番目の広さ)
- ・浜松市中山間地域振興計画の対象地域として、天竜区及び北区引佐町北部がある。
- ・天竜区のうち、春野地域、佐久間地域、水窪地域、龍山地域は、過疎対策自立促進法の指定地域を受けている。



中山間地域臨時給油所実証実験報告書より



浜松市役所から5km～15km圏と市内のSSの設置状況



意見交換会の様子

【視察等概要】

- 平成18年度には30か所のSSがあったが、約半分の16か所まで減少、龍山地域(旧龍山村)では、既にSSが無くなっている。最寄りのSSまで15km以上離れている住民が存在する集落は、天竜区内225集落のうち、少なくとも22集落以上点在している。
- 給湯ボイラーで灯油を使用している家庭が多いため、定期的な灯油の配達需要がある。
- 「移動式給油取扱所」は、通常のSSで毎日営業しても成立しない地域に向いている。
- 「移動式給油取扱所」は、災害時等臨時的な取扱いであれば、例えば、養生シートや油吸着剤による流出防止措置等はやむを得ないが、恒久的に使用する場合は、位置、構造等において適正の高いSS跡地の有効活用等により安全確保する必要がある。
- 過疎地のSSは、都市部のSSと違い、地域特性に応じて維持していくことが一番の目的であるため、行政と住民のコンセンサスの取組みが重要であり、近隣のSS事業者が当該SSを運営していくことが適切である。また、災害用備蓄としてSSを残したいという自治体もあるため、地域の実情や今ある仕組みを活用し、地元の合意を得ながら計画を進めていく必要がある。



【考察】

- 通常の形態のSSを毎日営業しても採算が合わない地域(集落が点在している地域等)には、定期的に巡回し、タンクローリーと可搬式給油設備を接続して給油等を行う形態やタンクローリーによる配達する形態が適している。
- 恒久的な運用で行う場合には、SS跡地の有効活用等により安全確保することが適当である。
- 近隣のSS事業者が巡回して運営を行うなど、地域の実情や既存の燃料供給ルートを活用し、地元の合意を得ながら計画を進めていくことが重要である。

【浜松市天竜区におけるSSの現状】

- 平成18年度には30か所のSSがあったが、約半分の16か所まで減少、龍山地域では、すでにSSが無くなっている。
- 最寄りのSSまで15km以上離れている住民が存在する集落は、天竜区内225集落のうち、少なくとも22集落以上存在していると推定される。
- 給湯ボイラーで灯油を使用している家庭が多いので、定期的に灯油の配達をしている。灯油の配達については、家まで持ってきて欲しいと依頼されれば、高台にある家でも持って行かなければならない。配達して欲しいというニーズがある以上、継続しようと考えている。
- 工事現場用に使用する軽油について、セルフSSではほとんど軽油を配達していないため、軽油の配達が以前よりも増えている。
- 以前は、過疎地域であっても販売価格には敏感で、麓に降りたときに買い物や給油をしていたため、SSが廃業してしまった。最近が高齢化が進み、遠くまで移動する人が少なくなってきたため、SSを地元につくってほしいという意見が多い。

【「移動式給油取扱所」を運営する上での運用面及び安全性面】①

- 「タンクローリーと可搬式給油設備を接続して給油等を行う給油取扱所(以下「移動式給油取扱所」という。)」は、消防法では現在規定されていない施設のため、仮取扱いの承認をとって実証実験を行い、安全面でも若干厳しい措置をとった。例えば、給油に来たお客は、車内にいると火災等発生時にすぐに避難できないため、車から降りてもらい、安全な場所に移動してもらってから給油をした。
- 実証実験では、運営側が自主的に安全面を重視して、最低人員を6名(給油業務、タンクローリー、支払処理、交通整理等)を確保した。危険物取扱者1名でも出来なくはないので、規制緩和が進んでいけば、事業として成り立つ可能性はあるのではないかと。
- 「移動式給油取扱所」は、どうしても給油に行けない、積雪で買いに行けない等、緊急時に助けが求められるような場合に、仮承認を受けて、臨時的な取扱いをするのに適したものであると思う。
- 臨時的な取扱いであれば、養生シートや油吸着剤による措置はやむを得ないが、通常のSSよりもリスク要因があり、恒久使用にする場合は、技術的な観点から改善すべきことがある。また、雪や雨が降った場合も不安定なものになるので、SS跡地を活用していくことも一案としてあるのではないかと。
- 「移動式給油取扱所」は、通常のSSで毎日営業しても成立しない場所に向いていると思う。地下タンクの入替えができず、人口減少もある中で、場所を変えやすいスタイルに優位性はある。ただし、中山間地はそもそも平地が少なく、安全面を考えると、もともと適地であったSS跡地で実施した方がよいのではないかと。
- 売木村のように、何らかの住民組織と既存SSが連携して運営していくことや、既存SSが曜日を指定して移動式にする運営等、既存SSと廃業SSを活用しつつ運用した方が、安全面や経営面でも効率的なのではないかと。

【「移動式給油取扱所」を運営する上での運用面及び安全性面】②

- 県や市が災害対策として購入し、普段は過疎対策として使用するなど、別の目的として使用すれば、コスト面はクリアできるのではないか。
- 運用するための人数確保が非常に大変であったので、本来はJAにも協力してもらいたかった。
- 「移動式給油取扱所」は、計量機とタンクローリーが必須であるが、運営主体について、油槽所側が主体となってタンクローリーを運営して地場のSSや住民組織等は計量機のみを保有・管理していくのか、それとも全てを管理する団体を設立するのか、やり方によって変わってくる。供給側と流通側との関係を具体的にしておいたほうが話が進みやすいと思う。元々災害時用に開発されたもので移動可能なものではあるが、使うときだけ毎回タンクローリーに乗せて設置したり、倉庫から出してくるのは、かなり負担が大きいので、基本は据付け型にして、災害時に展開可能にしておけば、公的資金も入れやすくなるのではないか。販売量が多くないので、計量機と一体型のタンクローリーを製造したほうが機能的なのではないか。
- 実証実験時、ガソリンスタンド所有のタンクローリーがなく、取引のある石油会社はタンクローリーを持っているが油槽所を持っていない、そこで石油元売りに燃料の確保を依頼した経緯がある。燃料の調達は難しいので、地域ぐるみで考える必要がある。

【今後のSSの運営面について】①

- 今あるSSも今後無くなってしまおうとの危機感があり、特に農業従事者にとってガソリンは、軽トラックや農業用機具を動かすために必要不可欠であるため、苦勞しなくてもガソリンが手に入るという状況は重要であると浜松市としても考えており、SSを公営化したり、地域住民とタイアップしたりということも想定される。
- 「移動式給油取扱所」を実施することにより、かえって従来型のSSが存続しづらくなってくると、地域の燃料供給体制としては脆弱になってしまうのではとの懸念がある。
- SS数は半減しているものの、現状では需要と供給のバランスが取れているのではと感じており、「どこでもスタンド」の実証実験において、21日間で約141万7千円の収入があったということは、他のSSの収入がそれだけ減ってしまっているということになる。地理的状況や供給のバランスをよく見ながらやる必要がある。
- 実証実験では、ガソリンを10円程度高い値段で販売したため、高すぎるとの意見もあったが、少くも高くても近くで販売してほしいというニーズもある。都市部のSSと中山間地のSSでは、状況が違う。
- 中山間地のSSは、地域のコミュニティのようなものなので、都市部のSSとは違った部分を考慮しなければならない。
- 以前、使い捨てのポリ容器に入った灯油販売があったが、使い勝手が悪かったので、もう少し改良すれば、備蓄用としても使えるのではないか。
- SSを曜日限定で営業するスタイルは、離島等で普通に見られる。
- 野菜の直売所ではお客とインターネットで相互に共有して納品したりという形もあるので、このような手法を石油でも取り入れることで、将来的には効率的に作業したり、コストを下げたりできるのではないか。

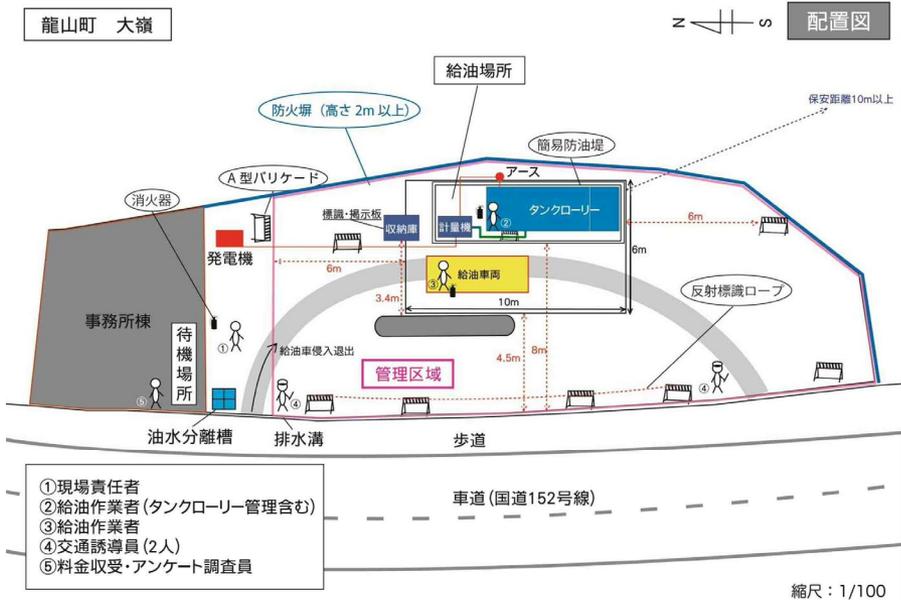
【今後のSSの運営面について】②

- SSは地域インフラの一環であり、中長期的に生き残っていくためには、どのような体制で運用していくのかということについて、地域住民のコンセンサスを得た計画があったほうが円滑に進むのではないか。
- SSの担い手不足が問題なのではないか。
- 離島では、通常の倍近い値段でガソリンを販売していても、住民からは特に苦情は出ていない。単価を上げて販売することにより、商売として成り立つのではないか。
- 商売として成り立たない原因として、高齢化でガソリンスタンドの担い手がいなくなり、ハード面も高額で更新が難しいというのがあるので、違った側面で援助すれば、SSの維持ができるのではないか。地域住民との信頼関係、最低限の生活ができて、過疎地域で頑張っている人たちに対する国からの補助金、ここにプラス α があれば、若い人でもやっていけるのではないか。
- ギリギリの単価で販売することで体力が無くなり、SSが廃業し、配達も遠方までいかなければならなくなるという悪循環になっているのではないか。都市部のように、半径1km以内に何件もあるような状況とは違うのではないか。
- 過疎地SSは、都市部のSSと違って、地域特性に応じて維持していくことが一番の目的であるので、住民のコンセンサスの取組みが大切である。また、災害用の備蓄としてSSを残したいという自治体もあるため、地域の実情や今ある仕組みを活用し、地元の合意を得ながら計画を進めていく必要がある。



中山間地域臨時給油所実証実験

【第1回 旧塩崎石油(天竜区龍山町大嶺)】





【第2回 春野協働センター一駐車場(天竜区春野町宮川)】

配置図

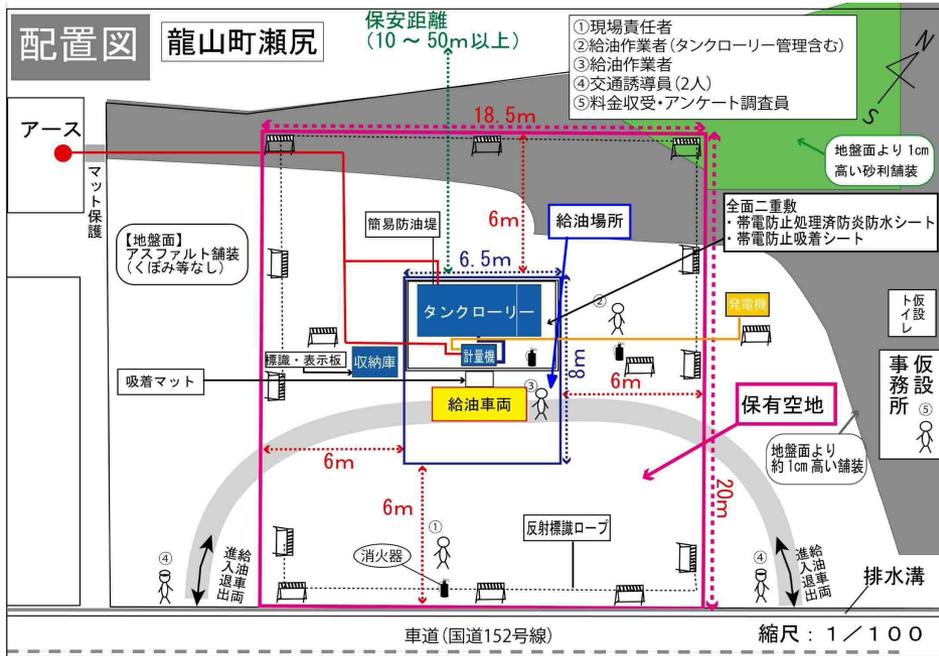
春野町宮川

(春野協働センター駐車場 設置エリア)





【第3回 旧瀬尻バス反転地(天竜区龍山町瀬尻)】



【第4回 旧JA熊切支店跡地(天竜区春野町石打松下)】

